

一般地方道東湯舟甲賀線道路改良事業に伴う

# 藤林長門守城跡発掘調査報告

## —阿山郡阿山町東湯舟所在—

1992・3

三重県埋蔵文化財センター

## 序

周囲を山に囲まれた伊賀盆地には、中世に活躍した上豪たちが残した数多くの城館が所在しています。それらの中には今も宅地として機能しているものもありますが、多くは山林や田畠になって、一般の人々にはその存在すらあまり知られていません。

阿山郡阿山町大字東湯舟字辻ノ内に所在する藤林長門守城跡もそうした城跡の一つですが、城跡の一部に一般地方道東湯舟甲賀線の道路改良事業が計画され、平成3年度に事前の緊急調査を実施しました。

ここにその結果を報告するとともに、今後の中世城館の研究の一助となることを希望しています。

調査にあたり、県土木部道路建設課、上野土木事務所、阿山町教育委員会をはじめ、地元の方々に多大のご協力をいただきましたことに感謝の意を表します。

平成4年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 中林昭一

## 例　　言

1. 本書は、一般地方道東湯舟甲賀線道路改良事業に伴い緊急発掘調査を実施した、阿山郡阿山町大字東湯舟字辻ノ内に所在する藤林長門守城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は次の体制で行った。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
調査第	第1課 第2係　主事　川戸達也
調査協力	阿山町教育委員会
事務支員	藤井尚登
3. 調査にあたっては、阿山町教育委員会・阿山町東湯舟の方々、及び県道路建設課・上野土木事務所建設二課・甲賀町教育委員会・甲南町教育委員会からの協力を得た。
4. 発掘調査後の整理については、上記の担当者のか、管理指導課が行った。
5. 本報告書の執筆・編集は川戸達也が担当した。
6. 測量図作成にあたっては国土地理院による第VI系座標を基準とし、方位の座標は座標北を用いた。等高線の間隔は20cmである。
7. 本書で用いた遺構表示略号は下記による。

S A : 上塙 S D : 溝 S E : 井戸

## 目　　次

I 前　　言	1
II 位置と環境	2
III 調査の成果	4
IV ま　　と　　め	6

## 図版目次

第1図　遺跡位置図（1:50,000）	2
第2図　遺跡地形図（1:6,000）	4
第3図　調査区位置図（1:1,000）	5
第4図　トレンチ上層断面図（1:100）	5
第5図　城館跡測量図（1:400）	7

## 写真図版目次

P L 1　藤林氏一族墓所 藤林長門守城跡	P L 3　調査前風景第IV郭 調査区A区
P L 2　調査前風景A区 調査前風景B区	P L 4　調査区B区 調査区C区

8. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。  
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# I 前 言

## 1. 調査の契機

一般地方道東湯舟甲賀線は、阿山郡東湯舟で県道伊賀信楽線から分岐し、滋賀県甲賀郡甲賀町上野で主要地方道草津伊賀線に合流する路線である。

この道路は、伊賀国と近江国を結ぶ路線の一つとして、古くから重要な生活道路として存在してきた。しかし、山間部の道路のために道路幅の狭い箇所が多いという現状であった。重ねて近年、甲賀町及び甲南町では県境の山地に工場の建設が進み、阿山町でも西湯舟地内で工業団地の開発に着手している。このような背景の下、地域振興のために大型自動車がスムーズに通行できるような道路の整備が必要とされていた。

この道路改良事業計画に伴い、その一部がかかることになった藤林長門守城跡は、既に周知の遺跡としてその存在が知られており、道路建設課との保護についての協議がもたれていた。しかし、路線の

変更は地形的に困難であるとの結論に達し、昭和62年道路建設課との協議で、事前調査を実施することになった。その後、用地買収の進捗状況と調査体制が整わなかったという理由から、調査実施時期は大幅に遅れ、東湯舟地内の工区の一部を残して工事が完了していた。

## 2. 調査の方法と経過

遺跡の調査は、城跡の現状が損なわれるため、城跡全体の測量調査と、削平部分300m<sup>2</sup>の発掘調査を行い、記録保存を図った。

調査区が東西に細長く、高低差があるため西からA区・B区・C区の3地区に別けて調査を行った。

表土は重機で排除し、その後人力により掘削を行った。排土はダンプカーによって、調査区外の埋め立て部分へ搬出した。

調査は、平成3年6月24日から開始し、同年7月5日に全てを終了した。



伝 藤林長門守 墓碑（正覚寺）

## II 位置と環境

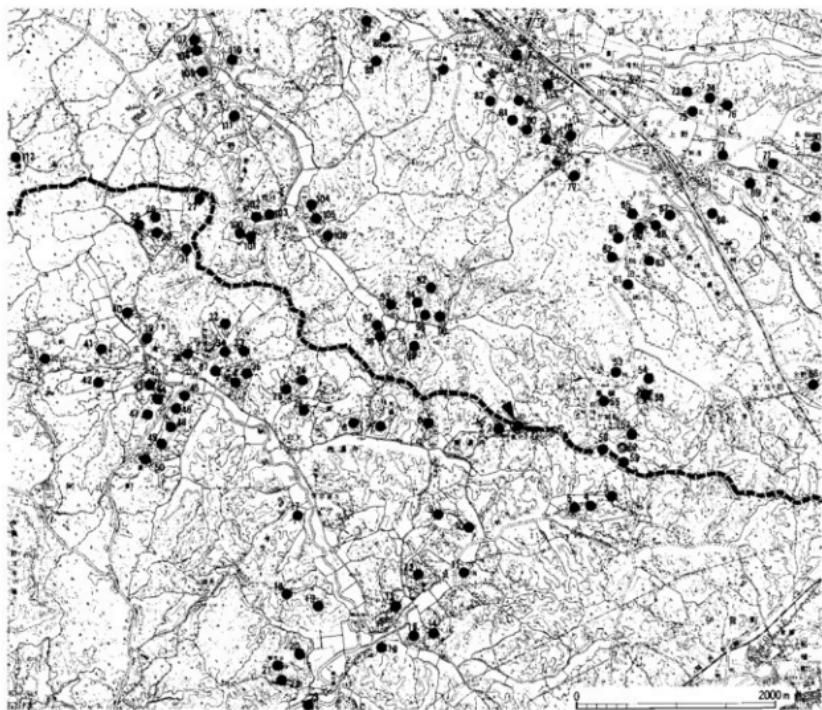
### 1. 位置

阿山町は伊賀盆地の北部に位置し、東は伊賀町、西と北は滋賀県甲賀郡、南は上野市に接し、標高200～270mの継灰質泥岩の水口丘陵と木津川断層によって形成された花崗岩地帯の信楽高原とからなる地層がほとんどを占めている。河合川が町域を南北に貫流し、東北より馬場付近で柄田川が合流し柄植川に注いでいる。

藤林長門守城跡(1)の所在する東湯舟地区は、町の東北部に位置し、水口丘陵がほとんどを占める標高220～250mの山地である。滋賀県との県境寄りに集落が散在し、西湯舟地区より伊賀町柘植に出る道が東西に貫通、分かれて北上し甲賀町和田に至る道

(東湯舟甲賀線)があり、伊賀と近江を結んでいる。東大寺の莊園である玉滻桜の開発にともなってできた湯船庄（のち東大寺領莊園となる）が、現在の西湯舟・東湯舟に比定されている。<sup>9</sup>

城跡は『三國地志』に、藤林長門守堡とあり、現況は山林及び畠になっている。行政区画上は、城跡のはほとんどが阿山町阿山町大字東湯舟字辻ノ内に位置し、北側の一部は滋賀県である。東に「城小谷（ジョコダニ）」、西に「城ノ谷（ジョノタニ）」の小字名を残しており、北は滋賀県甲賀郡甲南町大字柄ノ木字シーロに接している。隣接地は、いずれも城館に関係すると思われる地名である。藤林長門守城跡の西に道を隔てて藤山根津守城跡(2)が構えら



第1図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院「甲賀」1:25,000から]

れているが、その北側の宅地にも土塁が巡り、東湯舟甲賀線の南側丘陵上には削平地と堀切状の溝が見られる。また、城小谷の尾根上の宅地や畠にも土塁や削平地が存在する。

## 2. 歴史的環境

阿山町周辺には、古墳時代からの遺跡が数多く存在しており、歴史的背景を追って考察するべきであるが、ここでは藤林氏をはじめとする土豪たちの活動した背景に触れたい。

県内で発見されている中世城館は1000ヶ所を越えるが、その内の半数以上の550余りの城館が伊賀地内で見つかっている。阿山町内でも80ヶ所ほどが確認され、その中で垣岡氏城跡<sup>(1)</sup>、宮田氏城跡<sup>(2)</sup>、桶崎氏城跡<sup>(3)</sup>、菊永氏城跡<sup>(4)</sup>が発掘調査されている。(隣接する滋賀県甲賀郡甲賀町では77ヶ所が、同郡甲南町では51ヶ所が報告されている。)また、河合地区には『信長公記』に記載のある田矢氏の居城と考えられる田矢伊豫守城跡がある。湯舟地区周辺においては藤林長門守城跡の他、藤山攝津守城跡、服部氏城跡(5)、田名瀬氏城跡(6)、三矢氏城跡(7)、伊賀見城跡(58)、高峰南城跡(59)等が道沿いに並び、近江国へと続いている。近江国の高嶺山城と高嶺南城の間に大平千軒遺跡(52)（中世集落跡）があり、この地区を通る道が重要な路線であった様子がうかがえる。

1 藤林長門守城	21 雨乞山城	41 界外城	61 和田城	81 多喜北城	101 望月岸城
2 藤山攝津守城	22 竹内氏城	42 比久尼城	62 和田支城A	82 荷垣城	102 上野川城山2号城
3 岛東城	23 桶崎氏城	43 鈴鹿1号城	63 蓬田山城	83 多喜城	103 上野川城山1号城
4 岛西城	24 岩田氏城	44 木津鶴前守城	64 和田支城C	84 大原城	104 西田城
5 西構城	25 林ヶ谷城	45 鈴鹿5号城	65 公方屋敷支城	85 別府城	105 谷出城
6 服部氏城	26 勝谷氏城	46 鈴鹿3号城	66 公方屋敷	86 五反田口城	106 小池城
7 田名瀬氏城	27 近江見城	47 鈴鹿2号城	67 殿山城	87 池田西城	107 望月吉木城
8 三矢氏城	28 城之越城	48 鈴鹿4号城	68 上野城	88 池田東城	108 望月城
9 高殿城	29 蕁島加賀前	49 磐谷氏城	69 中山城	89 勝谷城	109 村島城
10 鶯山飛驒守城	30 内保攝勝守城	50 鈴鹿6号城	70 湘ノ城	90 油日富田城	110 望月支城
11 城氏城	31 南出城	51 山生田城	71 前山城	91 青木城	111 野川城
12 中谷氏城	32 川上4号城	52 大平千軒遺跡	72 木内城	92 馬杉北城	112 磐河城
13 横山氏城	33 川上2号城	53 高嶺北城	73 北上野A城	93 井口氏城	
14 菊永氏城	34 川上1号城	54 高嶺城	74 富田山城	94 馬杉中城	
15 深井氏城	35 岩島氏城	55 高嶺中城	75 北上野B城	95 関之下城	
16 中友田南城	36 中林氏城	56 高嶺東谷城	76 観音山城	96 染田勢	
17 幸子城	37 川上3号城	57 高嶺山城	77 獅子ヶ谷城	97 馬杉城	
18 竹内氏城	38 川崎氏城	58 伊賀見城	78 毛松北城	98 馬杉支城	
19 服部氏城	39 高木城	59 高嶺南城	79 山岡城	99 馬杉本城	
20 山内氏城	40 耳須氏城	60 和田支城B	80 多喜南城	100 上野川城山3号城	

藤林長門守城跡周辺の中世城館

この時代、伊賀国の人々たちは伊賀惣国一揆を組織し、また甲賀郡中惣との同盟を図り他国からの侵略に備えたが、信長の天正伊賀の乱によって滅びることとなる。

藤林長門守について、その存在を明らかにするような史料は現在までに発見されていない。ただし、一族と考えられる富士林氏が、天正9年(1581)、下友田の兩諸山において蒲生飛驒守氏郷の軍と戦ったと『伊乱記』に記載されている。江戸時代に入り、長門守の子孫と伝えられる藤林(富治林)一族は伊賀藤堂藩に仕え、「萬川集海」を著したり、「三國地志」の伊賀国編を執筆している。

その他の資料として、藤林長門守城跡繩張り内に「本覚深誓信土」(伝藤林長門守)「西岸院泛月湊看居土」(伝藤林又八郎保高)をはじめとする25基の墓碑が存在したが、大正年間に西湯舟の正覚寺に移転されている。これらの墓碑は近世のものがほとんどである。

また、西湯舟の伊室家には「藤林家由緒書」が伝えられているが、その内容の信憑性については検討を要する。湯舟藤林家の直系と言われる江州藤林家には藤林家過去帳が伝えられるが、又八郎保高から後の当主達のものが主である。

### III 調査の成果

#### 1. 発掘調査の結果

##### A区

調査区の西端にあたり南北28m、東西5m、標高約245.8mの地区である。表土直下は淡橙色の整地層で南に向かってやや傾斜している。表土から近代の磁器片や陶器片が出土したが、中世に遡ると考えられる遺物は見られず、遺構も確認できなかった。

##### B区

調査以前に郭の縁辺部と考えられていた南北7m、東西21m、標高約248.2mの調査区である。

表土を除去したところ整地跡が検出されたため、この面を精査したが遺構・遺物共に確認できなかった。この区の中央部にトレンチ（b）を設定し、整地の状況を確認したところ、第3層上面で近世～近代と考えられる遺物が出土した。

##### C区

調査区東端の南北4m、東西26m、標高約249.3mの地区で、表土直下は地山であり、整地の痕跡や遺構は確認できなかった。

以上のような調査結果から、A・B区は、近代の

宅地造成のために盛土された部分であると考えられる。C区は、城館の一部であると考えることが難しい。

このような状況から、発掘区の元の形状は南側の谷に向かって落ち込む急斜面であったと推測できよう。

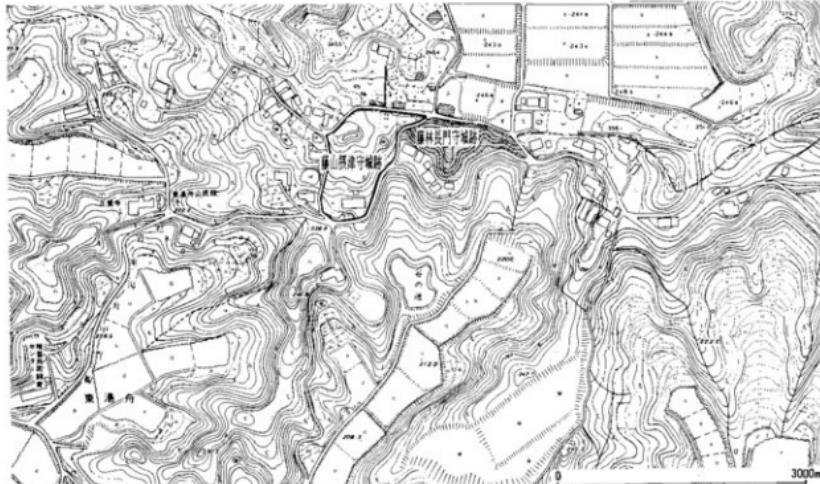
#### 2. 郭構造

##### 第I郭

南北40m、東西25m、標高約257mの郭で、ほぼ平坦である。東側に幅1m、長さ23mの規模を持つ上塁SA 1が残存しており、北側にも十塁の痕跡が見られること、西側に落ち込みがあることから少なくとも三方に十塁が巡っていたと考えられる。また、西側の段差に統いて南北12m、東西10mの三角形の緩斜面が存在し、SA 2へと統いている。この郭は藤林城跡の中で最大の面積を持っている。

##### 第II郭

南北20m、東西30m、標高約247.4mの郭である。幅3～1m、長さ26mの十塁SA 2は、この郭の西南隅へ張り出している。東側にも等高線の巡る様子



第2図 遺跡地形図(1:6,000)【都市計画図阿山町1:3,000及び甲南町1:2,500から】

から土塁もしくは尾根が存在した可能性があり、第II郭は城跡南西部に建てられている2戸の住宅の西側の宅地とほぼ重複するものと思われる。なお、郭の北隅にSE1、東にSE2の2つの井戸があるが、現在使用中の井戸であり現代の住宅に伴うものと思われる。

#### 第III郭

南北13m、東西9m、標高約259mの小郭で、第I郭より2mほど高くなっている。西辺中央から第I郭南辺中央に続く道が見られる。郭北側にやや高くなった部分があり、かつてこのあたりに藤林一族の墓石25基が置かれていたと言われる。また南側に

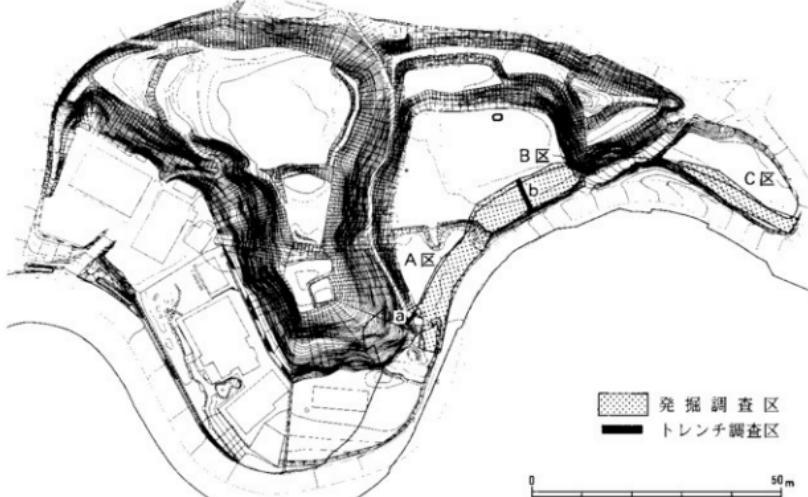
幅1mの土塁SA3が残存し、西側に続いていることが観察できる。

#### 第IV郭

一辺4.5mの正方形の小郭で、丘陵部の南端に位置する高まり部分である。現状では、第III郭との間に幅4mの溝SD1が尾根を切っているようにも観察できるが、溝北斜面の比高差2mに対し南斜面はわずか0.2mである。

#### 第V郭

現況は、南北24m、東西32m、標高約248.8mの規模を持つ。しかし、発掘調査の結果から南側は、近代の盛土によって造成された宅地であることが明



第3図 調査区位置図 (1:1,000)



第4図 トレンチ土層断面図 (1:100)

らかになった。郭の北側に幅2~5m、長さ55mの土塁SA4があり、郭と6mの比高差がある。郭の内部には、石組の井戸SE5が存在するが、時代は不明である。また、郭の西側に南北に通る道があり、東側には東西に通る道がある。

#### 第VI郭

南北5m、東西18m、標高約253mの郭で、SA4の西半分を約2m切り込んで造られている。

## IV ま と め

今回の発掘調査は、藤林長門守城跡全体約73,500m<sup>2</sup>の内わずか300m<sup>2</sup>を発掘しただけにすぎず、遺構は確認できなかった。遺物についても城館の存続時期に比定できるような物は出土しなかった。しかし遺跡全体の測量調査結果からは中世城館の構造を考慮するうえで重要な資料が得られることとなった。以下に今回の成果を記しまとめたい。

第I郭は標高が高く、土塁も整っていることから主郭と考えられる。この郭から南に延びる尾根上に第III郭、第IV郭を、尾根の西側の低地に第II郭を配置している。第II郭には居館の存在が想定される。第III郭は第I郭より一段高くなってしまっており城の中心と言ふべき位置に置かれている。第IV郭は尾根の南端の最高部に位置し、見張台と考えられる。第III郭との間に溝が切られているようにも見えるが、明確ではないため第III郭がこの部分にまで拡張されることも考えられる。この溝を堀切と考えるか、第IV郭の拡張と考えるかについては、さらなる調査及び検討をするが、ここでは「三重の中世城館」に従い、

#### 第VII郭

SA4の東端部に造られた南北4m、東西15m、標高約253.8mの小郭でSA4の東端部を切り込んで造られている。

調査区の東端にも削平地が見られるが、発掘調査の結果整地された痕跡が確認されず、遺構・遺物とも見られず、城跡に伴う施設とは思われない。

溝を堀切とし、第IV郭を見張台の遺構と考えた。第V郭の本来の形状は、10m×32m程の規模で、土塁SA4から南へ約14mの付近からは、前述のように急な谷地形であったと考えられる。第VI郭は位置や形状から、武者隠しのような施設と考えられよう。第VII郭は形状から、SA4への進入を阻むための防御施設と考えられる。また、郭直上のSA4東端部は北から東方面への眺望がよく、見張台の可能性も考えられる。

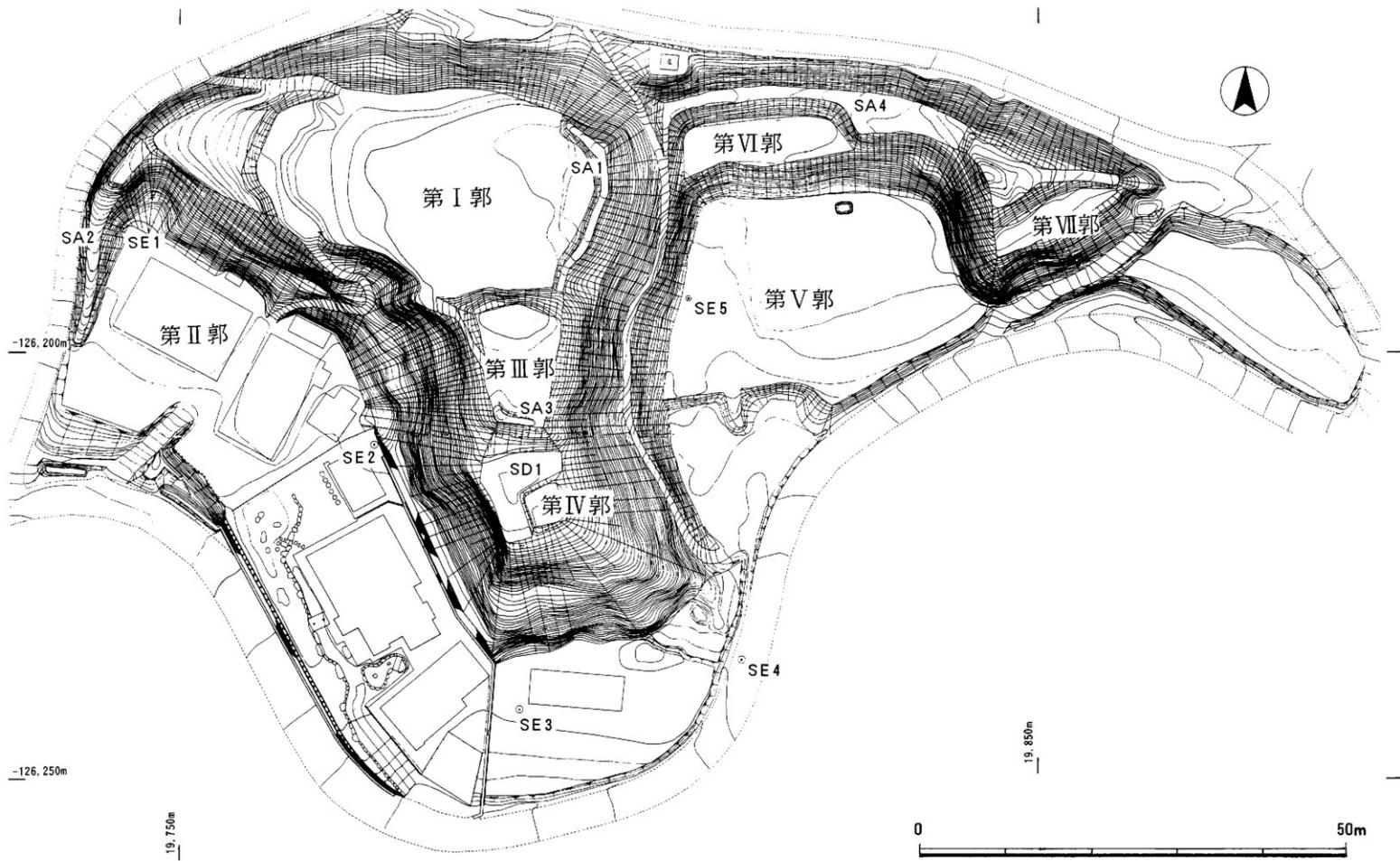
このような郭配置から見れば城は北および東の方に向意識して造られているように考えられる。しかし、西側に幅3mの道を隔てて藤林浜津守城跡が隣接していることを併せて考察すれば、西方面的防御も固められていると言うこともできよう。ただし、藤林長門守城跡の周辺東西500m、南北250mの範囲に存在する城跡や土塁等を、同時期に存在した遺構あるいは一連の城跡と考えるには、さらに詳しい調査を重ねていく必要があろう。

(川戸達也)

- (註)
- ① 角川日本地名大辞典24 三重県 角川書店  
『三重県の地名』 日本書紀名体系24 平凡社
- ② 藤草元甫『三國志地図』 宝曆13年
- ③ 『三重の中世城館』 二重県教育委員会  
伊賀中世城館調査会の調査による
- ④ 新田洋『伊賀氏城跡発掘調査報告』 三重県教育委員会1981
- ⑤ 宮田氏城 1982年阿山町教育委員会調査
- ⑥ 『東山古墳・通崎氏城』 現地説明会資料 三重県教育委員会 1986
- ⑦ 国本武・鷹井尚登『菊水氏城跡発掘調査報告』 阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会 1987
- ⑧ 『滋賀県中世城郭分布調査』 滋賀県教育委員会・滋賀県考古研究所 1983  
『滋賀県中世城郭分布調査2』 (甲賀の城) 滋賀県教育委員会・

御遺総合研究所 1984

- ⑨ 太田牛一『奈良公記』 慶長15年
- ⑩ 稲本紀昭『宇摩耶伊賀國人間供史料』 「菊水氏城跡発掘調査報告」付録3『山中文書』又者状断簡には、畿内を意識した内容が記されている。
- ⑪ 斎藤如幻『伊乱記』 延宝7年
- ⑫ 『萬川集』は寛政元年に幕府へ上申された忍法書である。内閣文庫本には甲賀恩・藤林保義と記されているというが、藤林家過去文書には武次氏昌とあり、本書が完成された延宝4年には氏昌は幼少のため間接視される。説には、傳六郎保道(保武)著とする。
- ⑬ 『三國地図』 唐麻元甫の編集の下、賀生由幸・富治林正直・川口雅吉によって執筆されたといふ。
- ⑭ 阿山町文化財



第5図 城館跡測量図 (1:400)



藤林氏一族 墓所（正覺寺）



藤林長門守城跡（南西から）



調査前風景 A区（東から）



調査前風景 B区（南から）



調査前風景 第IV郭（南から）



調査区 A区（西から）



調査区 B区（南西から）



調査区 C区（西から）

平成4(1992)年3月に刊行されたものをもとに  
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告106

・般地方道東湯舟甲賀線道路改良事業に伴う  
藤林長門守城跡発掘調査報告

——阿山郡阿山町東湯舟所在——

1992(平成4)年3月31日

編集 三重県埋蔵文化財センター  
発行

印刷 オリエンタル印刷株式会社

---